

## 病 名

久留米大学名誉教授

稲永 和豊

ある私立大学の文学部で健康心理学の講義を1年間だけ担当することになった。疾病の時代による移り変わりについて説明するために、「梅毒」を感染性疾患の代表的なものとして解説した。講義のあと、1人の学生が「梅毒」という病名が何故つけられたかを質問した。このような質問は医学部の学生からは受けたことがなかった。改めて書庫の片すみにしまっていた富士川游著「日本医学史」を取り出してしらべた。私か書庫にしまっていたこの本は昭和18年5月再版のもので定価15円と書いてある。この本の787頁から「第八 花柳病」の記載かはじまっている。その部分を読んでみると、梅毒はここでは黴毒と書かれている。その部分を見ると、梅毒は室町時代の末からわが国に伝わり、当時唐瘡(トウカサ)と呼び、また楊梅瘡・綿花瘡(メンケサウ)、あるいは天然瘡などと呼ばれていた。唐瘡と呼んだのは当時この病気は支那から伝わったと考えられていたからである。地名をつけるのはヨーロッパでも同じで、梅毒のことをナポリ病とかフランス病と呼んでいたという。

楊梅瘡と支那で呼んでいたのは、「熟した楊梅子(山もも)の如く」とあり、この楊梅子の梅をとったという説がある。梅毒の皮疹が山もものように見えたからであろうといわれている。

病名で思い出すのは **Beriberi** という病名である。脚気のことを **Beriberi** と呼んだ理由ははっきりとはおぼえていない。白米を常食とする東洋の地域、日本、支那、マレー半島、ジャワなどで問題となった病気である。

明治時代、徴兵制度によって陸海軍に入隊した兵士の三分の一近くが脚気にかかったというから当時としては大問題であった。

ジャワのバタヴィアで研究していたオランダ人、エイクマンはニワトリの多発神経炎が人間の脚気とよく似ており、このニワトリの病気はよくといた白米で飼った時におこり、玄米か糠を与える時にはおこらないことを発見した(1896)。

兵士の間に多くの脚気が発生したので、高木兼寛はその原因をたしかめるために、欧米諸国の海兵と日本の海兵とを比較研究して、日本人に脚気が多発するのは食物のせいであらうと考えた。その結果、白米を多く食べる海兵では脚気が多いのに、白米を少なくして麦を混ぜた上に肉類などを多くとらせた兵士では脚気が少ないことが明らかにされた。

**Beriberi** というのはジャワでつけられた病名である。1911年わが国では鈴木梅太郎、ポーランドのフンクによって脚気がビタミンB1の欠乏によっておこることが明らかになった。梅毒にしても脚気にしても原因も治療法も確立され、若い世代はこれらの病気の存在したことさえ忘れはじめている。